

# 密林の島 飯盒に「所」

## 終わらぬ夏

(一面の続き)

### 独自に捜索

日本から5000キロ南下した密林の島で、父の飯盒、そして、遺骨に巡り合えた時の記憶は、今も鮮明です。

1972年7月23日に羽田をたち、香港、ニューギニアを経て翌日、ソロモン諸島ガダルカナル島に到着しました。ニュージョージア島に渡ったのは26日です。

真っ赤なハイビスカスが咲き誇り、青く輝く波間を力アが滑っていきます。楽園のような光景と戦死公報で知った父の壮絶な最期。にわかには結びつきませんでした。

島での激戦は、出発前に戦友会の方々を訪ね歩き、聞いていました。父の部隊は43年7月27日、「清水台」と呼ばれた最前線の丘の陣地で、朝から激しい砲撃に見舞われ、ほぼ全滅したそうです。

その前夜、伝令として陣地向かい、父と言葉を交わした戦友がいました。わざわざ私を訪ね、最後に見た姿を教えてくださいました。

「自分は、岐阜県の所久雄と申します。最後まで頑張ります」

立派な体格の兵士から敬礼されたそうです。母の言った通り、父は勇敢だった。誇らしく思いました。

入ることができました。ハンダ飛行場へ入ると、たん形の池へ大きな自然壕。地図の目印を頼りに進み、丘を登ると、陣地跡らしきほみに出ました。

「たずんで父の最期に思いをはせると、突然、「カム・ヒア」と先導役の島民に呼ばれました。駆け寄ると、倒木の根元に弾痕の残る飯盒や小銃、割れた鉄兜など、1人分の装備が散乱しています。土を拭いた飯盒のふたに目をこらすと

△所と刻んである。右のつくりを△ケVのように書く癖が、何度も読み返してきた父の手紙の筆跡と同じです。「功待っていたぞ」と声が聞こえるようでした。「これは父の遺書だ」。そう思え、地に伏し、泣き叫ぶばかりありませんでした。

## 遺骨と対面 母の戦争終結

### 砲弾の破片

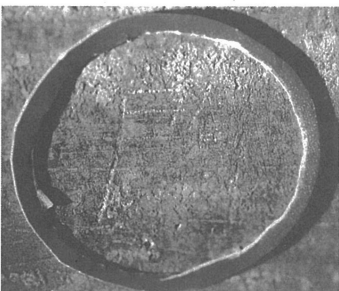
日没で初日の捜索は打ち切り、翌早朝に再び、飯盒を見つけた地点に向かいました。胸まであった下草が刈られて、土塊には、砲弾の破片も交ざっていて、戦死公報の状況と一致します。父の遺骨に違いはない。腕時計を見ると、27日午前8時を回っていました。まさに20年前のこの日、この場所で、最期を迎えた父との対面を果たしたのです。

### 遺品さすり

8月4日、高揚感に包まれて帰国しましたが、多くの日本人にとって、戦争は遠い昔の出来事なんだなと思いがちです。空港から岐阜の実家に向かう途中の駅や電車内で、手荷物からはみ出さず、



所さんが持ち帰った遺品の飯盒。ふたの丸く開いたところ、「所」の字が浮かぶ(下は拡大写真) 靖国神社遊就館提供

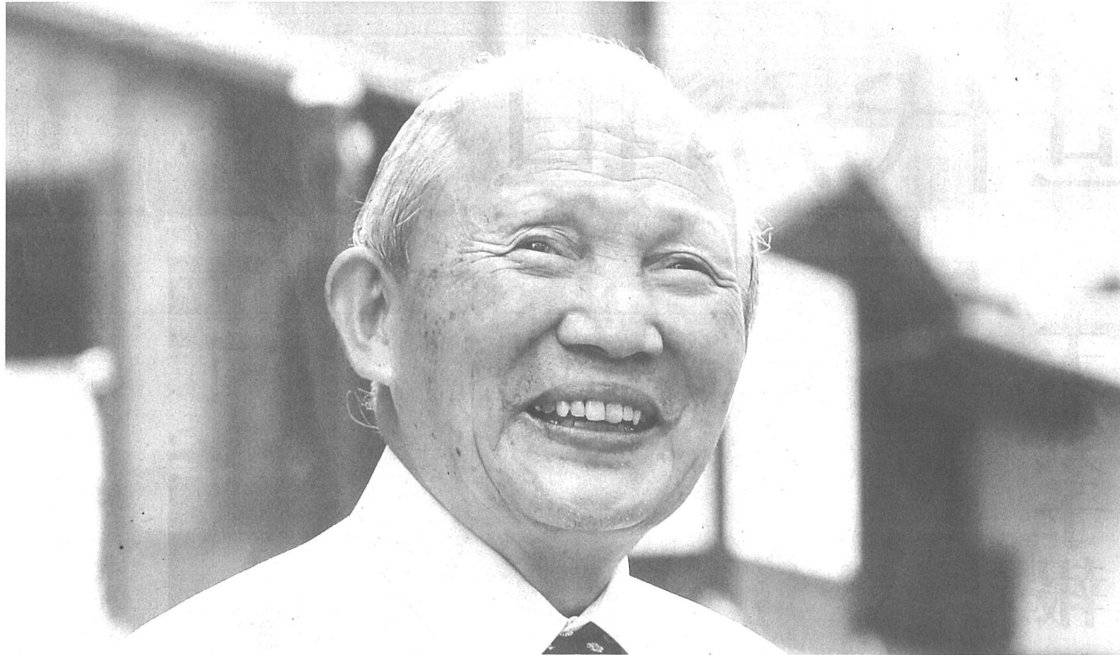


「父さんの飯盒だよ。これ所と読めるでしょう」沈黙に耐えかね、母に声をかけると「よう迎えに行ってきたよ」といって、あとはいつまでも、鉄兜や小銃をさすっていました。翌朝、母は一転して明るくなった。農家に嫁ぎ、26歳で夫を亡くし、残された田畑を守り、私を育てた母の長い戦争も終わりを告げたのでしよう。「お父さんの分まで生きると、91歳まで長生きしました。父の飯盒は50年祭を終えた93年夏、靖国神社に奉納しました。戦史資料施設「遊就館」に展示されています。私は72年以来、日本武道館での追悼式に欠かさず出席してきました。戦没者をしのぶ、政府主催の公式儀礼は、戦後の平和や繁栄を守っていく上で、欠かせない営みだと思います。今年はコロナウイルス対策で人数が絞られ、出席できませんが、自宅で家族と黙禱をさすります。

聞き手 沖村 豪  
写真 平 博之

と云、い、お、1941年、岐阜県生まれ。皇室や石の制度に詳しく、天皇の負担軽減を巡る政府の有識者会議で意見を述べた。近代大札関係の基本史料集成「なま」著者多数。日本の伝統的儀礼制度の研究で、2019年に日本学賞を受賞。

## 京都産業大名誉教授 所功さん 78



父・所久雄さん、母かなをさん(所)と抱かれる功さん(所)提供

### 手紙筆写 残した記憶

所さんが教職を得て、母かなをさんをひとり残して実家を離れた直後、父の戦死公報や手紙を入れた手さげ金庫が盗まれた。空になって見つかり、母は嘆いたが、所さんはすべて一言一句たがわず原稿用紙に書き写していた。だから、父の大切な記憶は生き残った。

敗戦で皇室研究が下火になっていく頃、膨大な史料に当たって宮中儀礼を研究し、伝統文化を守る大切さを説いてきた所さん。歴史家としての矜持は、父の生き証しを真摯に求め、戦友を巡り、難しい捜索に挑んだ若き日に原点があるのだと思う。

(沖村)